

## 孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究 (Ⅲ)

A Study of Loneliness (Ⅲ) —On causes, feelings, and coping behaviors—

広 沢 俊 宗 \*

Toshimune HIROSAWA

### 抄 録

Peplau, & Perlman (1982) は、孤独感を研究する際に、孤独感の先行条件、孤独感経験の諸特性、および孤独感に対処する方法の三者を区別することが有益であることを見出した。本研究では、この考え方に準拠し、(a) 孤独に対する原因帰属、感情反応、対処行動、および孤独感との相互関係、ならびに (b) 対処行動の因子構造について吟味された。調査は、大学生を対象に3種類の質問紙と2種類の尺度を用いて実施された。それらの質問紙および尺度は、孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する質問紙と、改訂版 UCLA 孤独感尺度、ならびに異なった関係における孤独感尺度であった。結果は、以下の通りである。

- 1) 孤独に対する原因帰属と感情反応は高度に構造化され、Weiss (1973) の提案する情緒的孤立と社会的孤立の区別に充分適合することが示された。
- 2) 対処行動の主成分分析により、男子では6因子、女子では7因子が抽出された。そして、男女間の因子の重要性の順位、およびその内容に差異のあることが示された。

孤独感の研究において、Peplau, & Perlman (1982)<sup>1)</sup>は、孤独感の先行条件、孤独感経験の諸特性、および孤独感に対処する方法を区別する必要があると指摘している。Rubenstein, & Shaver (1982)<sup>2)</sup>は、これらに対応させて、孤独の理由、孤独に対する感情反応、および対処行動に関する因子分析的研究を行っており、これらの構造は、Weiss (1973)<sup>3)</sup>の提案する情緒的孤立 (emotional isolation) と社会的孤立 (social isolation) の区別に充分適合するとしている。工藤・長田・下村 (1984)<sup>4)</sup>は、高齢者を対象に、孤独感強度、孤独に対する対処行動、ならびに感情反応について調査し、男女別に因子分析した結果、男女間の因子の重要性の順位、およびその内容に差異のあることを示している。また、広沢 (1985)<sup>5)</sup>は、孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する質問紙を作成し、大学生を対象にそれらの因子構造を明らかにしている。その結果、孤独の原因は、「積極的な対人接触の欠如」、「対人的疎外」、「機会の欠如・環境の変化」、「対人恐怖」、「考え方の相異・性格」の5因子、感情反応は、「抑

\* 関西国際大学助教授

孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究 (III)

表1 孤独の原因の因子構造 (広沢, 1985より作成)

第I因子 積極的な対人接触の欠如	自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから 自分が積極的に友達を作ろうとしないから 自分には友達ができないと思込んでいるため 物事を悲観的に考えすぎているため
第II因子 対人的疎外	人からの愛情や信頼が信じられないため 自分に頼れる人がいないため 身近な人との別離があったから 自分を頼りにしてくれる人がいないため 家庭環境に問題があるため
第III因子 機会の欠如・環境の変化	たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから 進学、就職、引越などで、環境が変化したから 自分のそばに誰もいないから 友達を作る機会に恵まれていないから
第IV因子 対人恐怖	人から拒絶されるのではないかとこの恐れを抱いているため まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため
第V因子 考え方の相異・性格	まわりの人たちの考え方と、自分の考えが異なっているため 自分自身の性格のため

表2 感情反応の因子構造 (広沢, 1985より作成)

第I因子 抑鬱	第II因子 絶望	第III因子 人恋しさ	第IV因子 憐憫	第V因子 苛立ち	第VI因子 疎外感
ゆううつな わびしい むなしい 意気消沈した 不安な	死にたい 何も 信じられない 逃げてしまいたい 誰にも 会いたくない 泣きたい 恐ろしい 絶望的な	誰かそばに いてほしい 誰かに会いたい 誰かに すがりたい さびしい 誰にも 会いたくない <sup>6)</sup>	情けない みじめな 腹立たしい	イライラした くやしい 腹立たしい	どこかへ 行きたい 取り残された 疎外された 他人が うらやましい

表3 対処行動の因子構造 (広沢, 1985より作成)

第I因子 憂さ晴らし	第II因子 趣味・仕事への没頭	第III因子 対人接触	第IV因子 忍耐・待機
タバコを吸う 車やバイクで 走りまわる パチンコをする マージャンをする 酒を飲む ディスコに行く TVゲームをする 旅に出る	何か(趣味など) に熱中する 読書をする 楽しいことを考える 音楽を聴く ラジオを聞く 仕事や勉強に 打ち込む	親しい人に会う 誰かに気持ちを 打ち明ける 誰かに電話する スポーツをする バカ騒ぎをする	時がたつのを 待つ じっと耐える ひとりになる 何もしないでいる 空想にふける 自分を見つめ直す 寝る 開き直る
第V因子 身近な行動への逃避	第VI因子 情緒的逃避	第VII因子 甘え	
買物に行く 人の多くいる所 に行く 自分の身のまわりを 整理整頓する 映画や劇を 見に行く 食べる 料理をする 歩きまわる	日記をつける 詩や歌を作る 手紙を書く テレビを見る <sup>7)</sup> 泣く	親に甘える 人にやつあたり をする ベットと遊ぶ	

鬱」、「絶望」、「人恋しさ」、「憐憫」、「苛立ち」、「疎外感」の6因子、対処行動は、「憂さ晴らし」、「趣味・仕事への没頭」、「対人接触」、「忍耐・待機」、「身近な行動への逃避」、「情緒的逃避」、「甘え」の7因子が抽出され(表1～3を参照)、これらを説明するいくつかの次元を仮説的に設定し、考察している。さらに、広沢(1986)<sup>8)</sup>は、抽出された因子ごとに性差、および孤独感強度による差を明らかにしている。

ところで、孤独感の測定に関しては、Russell(1982)<sup>9)</sup>によると、次の2つの概念的アプローチがとられてきた。ひとつは、一次元的アプローチで、孤独感を単一の、一次元的な現象とみなすものであり、Russell, Peplau, & Cutrona(1980)<sup>10)</sup>が開発した改訂版UCLA孤独感尺度はその代表的なものである。一方、Schnidt, & Sermat(1983)<sup>11)</sup>は、多次元的アプローチにより Differential Loneliness Scale(DLS)を開発しており、その概念モデルは、4×5の2つの直交する次元、すなわち、関係性の次元と相互作用性の次元から構成されている。前者は、1) 家族関係、2) 友人関係、3) 恋愛関係、4) より大きな集団あるいはコミュニティとの関係の4つ、後者は1) 関係の存在と欠如、2) 特定の関係への接近と回避、3) 協力、4) 評価、5) 特定の関係におけるコミュニケーションの5つのカテゴリーから成り立っている。

そこで、本研究では、孤独の原因、感情反応、および対処行動の相互関係を各因子間で明らかにするとともに、孤独感との関連性も併せて検討することを第1の目的とする。なお、孤独感の測定に関しては、改訂版UCLA孤独感尺度と異なった関係における孤独感尺度(修正版)の両方を用いることにする。また、すでに、対処行動に関しては、男女をまとめて因子分析し、その構造を析出した上で、因子ごとに性差および孤独感強度による差が明らかにされているが(広沢, 1986)<sup>12)</sup>、ここでは、男女別に因子分析することにより、因子構造の性差を明らかにすることを第2の目的とする。

## 方 法

### (1) 質問紙および尺度

#### 1. 孤独の原因に関する質問紙

孤独の原因に関する質問紙は、18項目から成っている。反応カテゴリーの形式は、「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の4件法で、孤独に陥る原因と思うほど高得点になるように、1点から4点に得点化されている。

#### 2. 感情反応に関する質問紙

感情反応に関する質問紙は、30項目から成っている。反応カテゴリーの形式は、「非常にあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で、孤独に陥ったときの感情にあてはまるほど高得点になるように、1点から4点に得点化されている。

#### 3. 対処行動に関する質問紙

対処行動に関する質問紙は、45項目から成っている。反応カテゴリーの形式は、「しばしば行う」「時々行う」「どちらともいえない」「あまり行わない」「全く行わない」の5件法で、孤独に陥ったときにしばしば行う行動ほど高得点になるように、1点から5点に得点化されている。

#### 4. 改訂版UCLA孤独感尺度

Russell, Peplau, & Ferguson (1978)<sup>13)</sup>が既に標準化していた尺度を、Russell, Peplau, & Cutrona (1980)<sup>14)</sup>が再検討して構成し直したものである。この20項目から成る改訂版尺度は、原尺度でみられた反応バイアスを避けるために、表現内容がポジティブとネガティブの各10項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は、「しばしば感じる」「時々感じる」「めったに感じない」「全く感じない」の4件法で、孤独感が高いほど高得点になるように、1点から4点に得点化されており、各被験者の得点は、最高80点から最低20点の範囲内にある。なお、本研究では、信頼性、妥当性が十分に認められている、工藤・西川 (1983)<sup>15)</sup>による邦訳版を使用した。

#### 5. 異なった関係における孤独感尺度 (修正版)

Schmidt, & Sermat (1983)<sup>16)</sup>が開発したDifferential Loneliness Scale (DLS) の概念モデルに基づき、広沢・田中 (1984)<sup>17)</sup>は、異なった関係における孤独感尺度を構成し、十分な信頼性、妥当性を見出している。さらに、広沢 (1986)<sup>18)</sup>は、主成分分析により因子負荷量が40未満であった4項目を修正することによって、さらに高度に信頼性、妥当性をもつ尺度 (修正版) を構成し直しており、本研究ではこの修正版が用いられた。この尺度は、家族関係、友人関係、恋愛関係、集団 (ここではクラブ) 内での関係の各10項目、計40項目から構成されており、反応バイアスを避けるために、表現内容がポジティブとネガティブの各20項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で、孤独感が高いほど高得点になるように、1点から4点に得点化されており、各被験者の得点は、各関係性の次元ごとに最高40点から最低10点の範囲内にある。

##### (2) 調査対象

対象者は、私立4年制大学の学生、男子209、女子193の計402名で、学年別内訳は、1年から4年の順に、男子42、90、49、28、女子46、87、35、25で、平均年齢は、20.5歳であった。

##### (3) 調査の実施

調査は、1984年11月に質問紙によって集団で実施された。

## 結 果

### (1) 孤独の原因、感情反応、および対処行動と孤独感との関係

表4は、孤独の原因、感情反応、および対処行動と孤独感との相互相関を示したものである。まず、孤独の原因と感情反応に関しては、第II因子の「対人的疎外」と第II因子の「絶望」が関連している ( $r = .25, p < .001$ )。また、感情反応の第VI因子「疎外感」は、孤独の原因のいずれの因子とも関連性がみられるが、特に、第IV因子の「対人恐怖」 ( $r = .32, p < .001$ )、および第III因子の「機会の欠如・環境の変化」 ( $r = .29, p < .001$ ) と結びつきが強いといえる。

次に、感情反応と対処行動に関しては、第I因子の「抑鬱」と第IV因子の「忍耐・待機」 ( $r = .31, p < .001$ )、第II因子の「絶望」と第VII因子の「甘え」 ( $r = .32, p < .001$ )、第III因子の「人恋しさ」と第III因子の「対人接触」 ( $r = .45, p < .001$ )、第VI因子の「疎外感」と第IV因子の「忍耐・待機」

( $r = .27, p < .001$ ) がそれぞれ関連しているといえる。なお、孤独の原因と対処行動に関しては、ほとんど関連性がみられなかった。

さらに、孤独の原因、感情反応、および対処行動と孤独感との関係を検討する。まず、異なった関係における孤独感尺度に関しては、家族関係、恋愛関係、集団内での関係のいずれにおいても、これらとはほとんど関連性がみられなかった。ただし、友人関係に関してのみ、孤独感が高いほど、「考え方の相異・性格」に原因を帰属する傾向にあり ( $r = .28, p < .001$ )、「人恋しさ」の感情を抱かず ( $r = -.27, p < .001$ )、「対人接触」といった対処行動をとらないことが示された ( $r = -.43, p < .001$ )。次に、改訂版UCLA孤独感尺度に関しては、友人関係における孤独感と同様に、孤独感が高いほど、「考え方の相異・性格」に原因を帰属する傾向にあり ( $r = .28, p < .001$ )、「人恋しさ」の感情を抱かず ( $r = -.33, p < .001$ )、「対人接触」といった対処行動をとらないことが示された ( $r = -.43, p < .001$ )。したがって、友人関係における孤独感と改訂版UCLA孤独感尺度による孤独感とは、非常に類似した傾向がみられた。

表4 孤独の原因、感情反応、および対処行動と孤独感との相互相関

原因	感情																	対処行動				DLS			UCLA-LS	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	家族	友人	恋愛	集団				
1		.46	.16	.26	.08	.20	.12	.11	.13	.11	.24	.05	.11	.11	.07	.10	.04	.01	-.02	-.05	-.05	-.02	-.09			
2			.40	.38	.18	.21	.25	.07	.21	.21	.25	.02	.08	.08	.12	.04	.10	.08	.14	.10	.03	.10	.03			
3				.15	.22	.23	.22	.10	.21	.24	.29	.07	.10	.10	.10	.07	-.02	.11	.10	.13	.03	.10	.11			
4					.06	.25	.18	.17	.24	.18	.32	-.09	.12	.09	.11	.14	-.05	.11	.01	.02	-.02	.09	.01			
5						.21	.20	.04	.17	.19	.27	-.03	.03	-.11	.19	-.08	.03	.04	.10	.28	.19	.09	.28			
6							.45	.35	.53	.40	.56	-.13	.03	.18	.31	.04	.15	.17	-.02	.00	-.06	.04	-.05			
7								.02	.47	.45	.49	.08	-.12	-.03	.28	.04	.29	.32	.14	.19	.12	.05	.18			
8									.17	.08	.36	-.04	.03	.45	.04	.17	.22	.17	-.08	-.27	-.13	-.19	-.33			
9										.68	.50	.05	.01	.15	.15	.06	.01	.23	.01	.03	.03	.05	.03			
10											.42	.14	.01	.18	.15	.07	-.07	.25	.04	.06	.05	.04	.05			
11												.05	.05	.09	.27	.18	.09	.18	.04	.03	.04	.03	.01			
12													.12	.26	-.07	.19	-.05	.03	.06	-.02	-.01	-.16	.01			
13														.32	.17	.41	.10	.21	-.09	-.10	-.23	.05	-.07			
14															.02	.43	.17	.29	-.15	-.43	-.28	-.16	-.43			
15																.07	.12	.14	.08	.08	.02	.11	.03			
16																	.18	.30	-.11	-.16	-.09	.06	-.12			
17																		.31	.03	-.10	-.13	-.07	-.09			
18																			-.15	-.03	-.06	-.04	-.05			

1=積極的な対人接触の欠如；2=対人的疎外；3=機会の欠如・環境の変化；4=対人恐怖；5=考え方の相異・性格；6=抑鬱；7=絶望；8=人恋しさ；9=憐憫；10=苛立ち；11=疎外感；12=憂さ晴らし；13=趣味・仕事への没頭；14=対人接触；15=忍耐・待機；16=身近な行動への逃避；17=情緒的逃避；18=甘え。

## (2) 男女別による対処行動の主成分分析

表5は、男子のみを分析対象としたものであり、対処行動45項目の相関マトリックスからScreetestにより最終的に因子数を6と決定し、主成分分析を行いVarimax回転後の因子負荷量を示したものである。これらの累積分散寄与率は41.0%で、回転後の因子負荷量の絶対値が.40以上の項目は、説明分散の大きい順に、第I因子で6項目、第II因子で8項目、第III因子で4項目、第IV因子で6項目、第

表5 対処行動の主成分分析によるVarimax回転後の因子負荷量 (男子)

	I	II	III	IV	V	VI
仕事や勉学に打ち込む	.66	-.12	-.25	.10	.00	-.01
買物に行く	.61	.06	.06	.14	.15	.12
読書をする	.54	-.32	-.02	.14	.14	.03
映画や劇を見に行く	.51	.13	.08	.30	.05	-.13
人の多くいる所に行く	.50	.18	.07	.17	.07	.05
何か(趣味など)に熱中する	.48	.15	.11	.12	.02	.01
食べる	.37	-.20	.14	.13	.01	.32
自分の身の回りを整理・整頓する	.35	.05	-.04	-.12	.09	.32
ラジオを聞く	.34	-.01	.11	.19	-.04	.26
音楽を聴く	.29	.20	.15	.24	.00	-.13
タバコを吸う	-.13	.64	-.05	.14	.02	-.00
車やバイクで走りまわる	-.02	.60	.09	-.01	.08	.03
パチンコをする	-.13	.60	-.11	-.11	-.01	.22
ディスコに行く	.07	.50	.15	-.10	.16	-.01
マージャンをする	.26	.49	-.14	.02	.06	.04
酒を飲む	-.03	.45	.17	.19	.05	.01
お金を浪費する	.22	.42	-.05	-.03	-.13	.34
バカ騒ぎをする	.20	.40	.28	-.00	-.05	.08
親しい人に会う	.11	-.05	.64	-.23	-.07	-.19
誰かに気持ちを打ち明ける	-.10	-.07	.64	-.08	.25	.00
誰かに電話する	-.18	.09	.62	-.06	.16	.13
スポーツをする	.09	.25	.51	.08	.11	-.14
努めて明るくふるまう	.16	-.07	.32	-.04	-.02	.08
楽しいことを考える	.14	.05	.30	.01	-.20	.24
時がたつのをまつ	.00	.12	.01	.71	.08	.06
じっと耐える	.16	-.09	-.18	.70	-.08	-.15
ひとりになる	-.10	.17	-.16	.60	.21	-.06
何もしないでいる	-.11	-.07	-.12	.53	.01	.14
自分を見つめ直す	-.03	-.02	.41	.49	.14	-.38
空想にふける	.04	-.09	.11	.46	.20	.25
歩き回る	.18	.08	-.01	.32	.29	.13
日記をつける	-.03	.00	.07	.06	.73	.02
手紙を書く	.03	-.18	.30	-.15	.60	.15
詩や歌を作る	.19	.14	-.11	.08	.58	.03
泣く	-.22	.07	-.06	.18	.52	.16
旅に出る	.13	.29	.06	.03	.43	.02
料理をする	.28	.23	-.05	.00	.35	.07
テレビを見る	.30	-.01	.24	.14	.34	.28
楽器を演奏する	.27	.21	.01	.10	.31	-.13
開き直る	-.16	.09	.26	.25	-.30	.26
親に甘える	.11	.05	.00	.02	.08	.57
人にやつあたりをする	-.22	.16	.00	.05	.10	.55
TVゲームをする	-.01	.12	-.07	-.11	.04	.55
ペットと遊ぶ	.27	-.10	-.00	-.04	.19	.35
寝る	.13	-.08	.22	.27	-.03	.28

V因子で5項目、第VI因子で3項目である。

第I因子は、「仕事や勉学に打ち込む」(.66)、「読書をする」(.54)、「何か(趣味など)に熱中する」(.48)といった趣味・仕事への没頭と、「買物に行く」(.61)、「映画や劇を見に行く」(.51)、「人の多く

表6 対処行動の主成分分析によるVarimax回転後の因子負荷量 (女子)

	I	II	III	IV	V	VI	VII
親しい人に会う	.70	-.05	-.04	.04	-.05	.16	.00
誰かに電話する	.70	-.11	-.00	.01	.01	-.00	.17
誰かに気持ちを打ち明ける	.64	.09	.06	-.08	-.14	.13	.03
ひとりになる	-.47	.46	.29	-.06	.02	.13	.05
手紙を書く	.46	-.14	-.03	.02	-.06	.40	.02
人の多くいる所に行く	.35	-.11	.13	.05	.07	-.22	.07
バカ騒ぎをする	.35	.22	.26	.14	.17	-.10	-.16
買物に行く	.34	-.12	.30	.11	-.01	-.02	.32
何もしないでいる	.00	.63	-.12	-.14	.11	-.01	.19
寝る	-.02	.58	-.08	.26	.04	-.22	.19
時がたつのをまつ	-.15	.52	-.12	.10	.09	-.05	.03
じっと耐える	-.14	.51	-.37	.24	.04	-.03	-.13
泣く	.38	.50	-.15	-.15	.06	.22	-.15
空想にふける	-.03	.48	.17	.05	-.13	.34	.07
開き直る	.07	.47	.31	.00	-.08	-.25	.06
自分を見つめ直す	-.01	.35	.03	.30	-.22	.31	.15
歩き回る	-.00	.11	.62	-.05	-.04	.11	.05
映画や劇を見に行く	.03	-.23	.49	.11	.07	.00	.10
自分の身の回りを整理・整頓する	-.09	-.12	.41	-.02	-.04	-.03	-.07
ラジオを聞く	-.01	.02	.39	.18	-.10	-.16	.10
楽器を演奏する	-.14	-.08	.38	.21	-.01	.33	-.03
旅に出る	.02	.01	.35	.02	.23	.21	.23
何か(趣味など)に熱中する	-.01	-.08	.18	.69	-.01	-.07	-.05
楽しいことを考える	.29	.07	-.11	.59	-.01	-.00	.22
仕事や勉強に打ち込む	-.19	.16	.07	.58	.00	.10	-.17
努めて明るくふるまう	.31	.20	-.05	.57	.02	-.01	-.07
読書をする	-.16	-.17	.00	.43	.12	.36	.00
スポーツをする	.23	-.10	.25	.42	.07	-.11	-.05
パチンコをする	-.11	.00	-.16	-.00	.69	.12	.23
タバコを吸う	-.09	.15	-.15	.06	.64	.01	.07
マージャンをする	-.13	.11	.07	.02	.56	.04	.14
ディスコに行く	.22	-.12	.02	.08	.54	-.17	-.12
車やバイクで走りまわる	.10	-.11	.04	-.04	.53	.02	-.10
酒を飲む	.16	.15	.23	-.19	.49	.09	-.20
TVゲームをする	-.14	.08	.05	-.04	.33	-.15	.32
日記をつける	.26	.01	.01	-.14	-.02	.69	-.00
詩や歌を作る	.11	-.09	.12	.18	.13	.62	-.05
テレビを見る	.13	.03	.20	-.11	-.01	-.49	.37
食べる	.02	.26	.12	-.02	.05	-.10	.65
親に甘える	.48	.04	-.18	.04	-.08	.10	.51
人にやつあたりをする	.18	.38	.04	-.17	.02	.02	.42
音楽を聴く	.17	.05	.32	.20	-.08	.18	-.37
料理をする	.17	-.23	.07	.15	.12	.20	.31
ペットと遊ぶ	.24	.09	-.13	.15	.17	.24	.07
お金を浪費する	.29	.11	.20	.04	.18	.08	.24

いる所に行く」(.50)といった外出を表す項目に高く負荷していることから、「趣味・仕事への没頭、外出」因子と命名する。同様にして、第II因子は、「タバコを吸う」(.64)、「車やバイクで走りまわる」(.60)、「パチンコをする」(.60)、「ディスコに行く」(.50)、「マージャンをする」(.49)、「酒を飲む」

(.45) といった憂さ晴らし行動を示すことから、「憂さ晴らし」因子、第 III 因子は、「親しい人に会う」(.64)、「誰かに気持ちを打ち明ける」(.64)、「誰かに電話する」(.62) などより、「対人接触」因子、第 IV 因子は、「時がたつのをまつ」(.71)、「じっと耐える」(.70)、「ひとりになる」(.60)、「何もしないでいる」(.53)、「自分を見つめ直す」(.49)、「空想にふける」(.46) より、「忍耐・思索」因子、第 V 因子は、「日記をつける」(.73)、「手紙を書く」(.60)、「詩や歌を作る」(.58)、「泣く」(.52) より、「情緒的逃避」、第 VI 因子は、「親に甘える」(.57)、「人にやつあたりする」(.55)、「TVゲームをする」(.55) より、「甘え」因子と、それぞれ命名された。

表 6 は、女子のみを分析対象としたものであり、対処行動 45 項目の相関マトリックスから Scree test により最終的に因子数を 7 と決定し、主成分分析を行い Varimax 回転後の因子負荷量を示したものである。これらの累積分散寄与率は 44.0% で、回転後の因子負荷量の絶対値が .40 以上の項目は、説明分散の大きい順に、第 I 因子で 5 項目、第 II 因子で 7 項目、第 III 因子で 3 項目、第 IV 因子で 6 項目、第 V 因子で 6 項目、第 VI 因子で 3 項目、第 VII 因子で 3 項目である。

第 I 因子は、「親しい人に会う」(.70)、「誰かに電話する」(.70)、「誰かに気持ちを打ち明ける」(.64)、「ひとりになる」(-.47)、「手紙を書く」(.46) より、「対人接触」因子、第 II 因子は、「何もしないでいる」(.63)、「寝る」(.58)、「時がたつのをまつ」(.52)、「じっと耐える」(.51)、「泣く」(.50)、「空想にふける」(.48)、「開き直す」(.47) より、「忍耐・待機」因子、第 III 因子は、「歩き回る」(.62)、「映画や劇を見に行く」(.49)、「自分の身の回りを整理・整頓する」(.41) より、「身近な行動への逃避」因子、第 IV 因子は、「何か(趣味など)に熱中する」(.69)、「楽しいことを考える」(.59)、「仕事や勉学に打ち込む」(.58)、「努めて明るくふるまう」(.57)、「読書をする」(.43)、「スポーツをする」(.42) より、「趣味・仕事への没頭」因子、第 V 因子は、「パチンコをする」(.69)、「タバコを吸う」(.64)、「マージャンをする」(.56)、「ディスコに行く」(.54)、「車やバイクで走りまわる」(.53)、「酒を飲む」(.49) より、「憂さ晴らし」因子、第 VI 因子は、「日記をつける」(.69)、「詩や歌を作る」(.62)、「テレビを見る」(-.49) より、「情緒的逃避」因子、第 VII 因子は、「食べる」(.65)、「親に甘える」(.51)、「人にやつあたりする」(.42) より、「食、甘え」因子とそれぞれ命名された。

## 考 察

まず、孤独の原因と感情反応の因子構造が、Weiss (1973)<sup>19)</sup>の提案する情緒的孤立と社会的孤立の区別に適合するかどうかを考察する。Weiss によると、情緒的孤立は、最も親密な社会的連帯が断たれた成人の経験する孤独感の形態であり、「両親に見捨てられてしまったのではないかと心配する幼い子どもの苦痛」に近い感情を伴うとされている。孤独の原因の第 II 因子「対人的疎外」は、「人からの愛情や信頼が信じられないため」「自分に頼れる人がいないため」「身近な人との別離があったから」などに高く負荷しており、いわゆる親密な関係の欠如によるものといえる。また、感情反応の第 I 因子「絶望」は、「死にたい」「何も信じられない」など「親に見捨てられた子どもの絶望感」に似た感情と捉えることができる。これらより、「対人的疎外」因子と「絶望」因子は互いに関連するはずであり、その通りの結果が得られている ( $r = .25, p < .001$ )。一方、社会的孤立は、「友達がまったくいな



くなくなってしまった子ども」の場合のように、退屈や仲間はずれといった感情と連合しており、この種の感情は、成人の間では新しい仕事や新しい近隣集団、そして新しい都市に移ったあとによく起こるとされている。孤独の原因の第 III 因子「機会の欠如・環境の変化」は、まさに、そのような理由を示すものであり、感情反応の第 VI 因子「疎外感」は、仲間はずれに類似した感情といえる。これらより、「機会の欠如・環境の変化」因子と「疎外感」因子は相互に結びついているとみなせるが、実際の通りの結果であった ( $r = .29, p < .001$ )。以上より、Rubenstein, & Shaver (1982)<sup>20)</sup>と同様に、孤独の原因と感情反応の因子構造は、Weiss (1973)<sup>21)</sup>の情緒的孤立と社会的孤立の区別に充分適合することが示された。なお、「疎外感」因子は、孤独の原因の第 IV 因子「対人恐怖」とも関連しているが ( $r = .32, p < .001$ )、「拒絶への恐れ」や「仲間はずれ」といった理由から「疎外感」を抱くという関係は、充分に対応しているものと考えられる。

次に、感情反応と対処行動に関しては、抽出された因子を分類するために、広沢 (1985)<sup>22)</sup>が設定した「対自的-対他的」次元をもとに考察する。この次元は、感情反応や対処行動が、自己に向かってるか他者に向かってるかといった方向性を示すものである。第 I 因子の「抑鬱」と第 IV 因子の「忍耐・待機」( $r = .31, p < .001$ )は、対自的な方向に感情が生起し、対自的な方向へ対処しており、第 III 因子の「人恋しさ」と第 III 因子の「対人接触」( $r = .45, p < .001$ )は、対他的な方向に感情が生起し、対他的な方向へ対処している。これらはともに、感情反応と対処行動が同方向に向かった関係といえる。一方、第 II 因子の「絶望」と第 VII 因子の「甘え」( $r = .32, p < .001$ )は、対自的な方向に感情が生起し、対他的な方向へ対処しており、第 VI 因子の「疎外感」と第 IV 因子の「忍耐・待機」( $r = .27, p < .001$ )は、対他的な方向に感情が生起し、対自的な方向へ対処しており、それぞれ関連しているといえる。これらはともに、感情反応と対処行動が逆方向に向かった関係といえる。以上より、感情反応と対処行動の関連性は、方向性の次元から、4つのタイプ(対自的-対自的、対他的-対他的、対自的-対他的、対他的-対自的)が見出されたといえる。これらがどのような場合に同方向、あるいは逆方向になるかは、今後さらに検討する必要がある。また、孤独の原因と対処行動に関しては、ほとんど関連性がみられなかったが、このことは、孤独の原因と感情反応、および感情反応と対処行動に結びつきがみられたことを考慮すると、孤独の原因は、感情反応を媒介変数として対処行動に関連しているとも考えられるが、併せて今後の課題としたい。

孤独の原因、感情反応、および対処行動と孤独感との関係に関しては、異なった関係における孤独感尺度による友人関係における孤独感と改訂版UCLA孤独感尺度による孤独感とで、ほぼ一致した結果が得られた。すなわち、孤独感が高いほど、「考え方の相異・性格」に原因を帰属する傾向にあり (DLS, UCLA-LS:  $r = .28, p < .001$ )、「人恋しさ」の感情を抱かず (DLS:  $r = -.27, p < .001$ , UCLA-LS:  $r = -.33, p < .001$ )、「対人接触」といった対処をとらないということである (DLS, UCLA-LS:  $r = -.43, p < .001$ )。この点に関しては、DLSの友人関係における孤独感と改訂版UCLA孤独感尺度による孤独感との間に高い相関が得られていることから説明される ( $r = .73, p < .001$ : 広沢, 1984<sup>23)</sup>;  $r = .83, p < .001$ : 広沢, 1986<sup>24)</sup>)。すなわち、大学生にとっての社会的関係の重要な部分が、友人関係で占められているということであろう。このため、家族関係、恋愛関係、集団内での関係のいずれにおいても、これらとはほとんど関連性がみられなかったと考えられる。

最後に、男女別による対処行動の因子構造について考察する。男子の対処行動は6因子抽出されており、寄与率の高い順に、「趣味・仕事への没頭、外出」因子、「憂さ晴らし」因子、「対人接触」因子、「忍耐・思索」因子、「情緒的逃避」因子、「甘え」因子である。一方、女子の対処行動は7因子抽出されており、寄与率の高い順に、「対人接触」因子、「忍耐・待機」因子、「身近な行動への逃避」因子、「趣味・仕事への没頭」因子、「憂さ晴らし」因子、「情緒的逃避」因子、「食、甘え」因子である。以上より、男女間の因子の重要性の順位が異なっており、男子では、第I因子が「趣味・仕事への没頭、外出」であり、孤独を肯定的に受け入れ積極的に対処しているのに対し、女子では、第I因子が「対人接触」より、自己開示や対人コミュニケーションといった対他的行動によって対処していることが示唆される。さらに、男子では、「憂さ晴らし」、「対人接触」と続くのに対し、女子では、「忍耐・待機」、「身近な行動への逃避」となっている。一方、男女共通に抽出された因子は、「憂さ晴らし」、「対人接触」、「情緒的逃避」の3因子である。男子の「趣味・仕事への没頭、外出」因子は、女子では、「身近な行動への逃避」因子と「趣味・仕事への没頭」因子に分離している。また、残りの2因子は男女で若干内容が異なっている（男子：「忍耐・思索」因子；女子：「忍耐・待機」因子、男子：「甘え」因子；女子：「食・甘え」因子）。以上より、高齢者の場合と同様に（工藤ら，1984）<sup>25)</sup>、大学生においても、対処行動に関しては、男女間の因子の重要性の順位、ならびにその内容に差異のあることが示された。

#### 注・引用文献

- 1) Peplau, L.A. & Perlman, D.: "Perspective on loneliness" In Peplau, L.A. & Perlman, D.(Eds.). Loneliness : A source book of current theory, research and therapy. John Wiley & Sons. 1982, pp.1-18..
- 2) Rubenstein, C.M. & Shaver, P.: "The experience of loneliness" In Peplau, L.A. & Perlman, D.(Eds.). Loneliness : A source book of current theory, research and therapy. John Wiley & Sons. 1982, pp.206-223.
- 3) Weiss, R.S.: "Loneliness : The experience of emotional and social isolation" Cambridge, Mass. : Massachusetts Institute of Technology Press. 1973.
- 4) 工藤 力・長田久雄・下村陽一: 「高齢者の孤独に関する因子分析的研究」『老年社会科学』, 6巻, 1984, 167-185頁.
- 5) 広沢俊宗: 「孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究 (I)」『関西学院大学社会学部紀要』, 51号, 1985, 157-168頁.
- 6) 因子負荷量の符号は、マイナスである。
- 7) 因子負荷量の符号は、マイナスである。
- 8) 広沢俊宗: 「孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究 (II)」『関西学院大学社会学部紀要』, 53号, 1986, 127-136頁.
- 9) Russell, D: "The measurment of loneliness" In Peplau, L.A. & Perlman, D.(Eds.). Loneliness : A source book of current theory, research and therapy. John Wiley & Sons. 1982, pp.81-104.
- 10) Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C. E.: "The revised UCLA loneliness scale : Concurrent and discriminant validity evidence" Journal of Personality and Social Psychology. Vol.39, 1980, pp.472-480.
- 11) Schnidt, N. & Sermat, V.: "Measuring loneliness in different Relationship" Journal of Personality and Social Psychology.

孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究 (Ⅲ)

Vol.44, 1983, pp.1038-1047.

12) 前掲書 8)

13) Russell, D., Peplau, L.A., & Ferguson, M.: "Developing a measure of loneliness" *Journal of Personality Assessment*.  
Vol.42, 1978, pp.290-293.

14) 前掲書 10)

15) 工藤 力・西川正之: 「孤独感に関する研究 (Ⅰ) - 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 -」『実験社会心理学研究』,  
22巻, 1983, 99-108頁.

16) 前掲書 11)

17) 広沢俊宗・田中國夫: 「異なった関係における孤独感尺度の構成」『関西学院大学社会学部紀要』, 49号, 1984, 179-  
188頁.

18) 前掲書 8)

19) 前掲書 3)

20) 前掲書 2)

21) 前掲書 3)

22) 前掲書 5)

23) 前掲書 17)

24) 前掲書 8)

25) 前掲書 4)

## Abstract

Peplau, & Perlman (1982) found it useful to distinguish among antecedents of loneliness, characteristic of the experience of being lonely, and ways in which people cope with loneliness. Utilizing the distinction, this study examined (a) the relationships among causal attributions for loneliness, feelings associated with loneliness, coping behaviors with loneliness and loneliness, and (b) the factor structure of coping behaviors with loneliness. Three kinds of questionnaires and two kinds of scales were administered to undergraduate students (N=402). They were questionnaires with regard to causes, feelings, and coping behaviors, Revised UCLA Loneliness Scale and Differential Loneliness Scale (DLS).

The results are as follows.

- 1) Causal attributions for loneliness and feelings associated with loneliness were highly structured, and these structures fit well with Weiss's (1973) distinction between emotional and social isolation.
- 2) The factor analysis of coping behaviors with loneliness produced six factors in males and seven factors in females. It was found that there are differences between the two sexes in the order of the produced factors and items highly loaded with each factor.